

ギャラリー展によせて

中島京子 小説家

わたしが八戸に通っていたのは、もうずいぶん前のことになります。

『かたづの!』という小説を書くために、何度か行き、本が出たあとも、ご縁があつてうかがうことが続きました。種差海岸に吹く風の心地よさを、折に触れて思い出します。

コロナのせいで、ふらりと旅に出ることができなくなってしまい、思いつくまに新幹線に乗って出かけて、海と草原がつながるあの光景を見てなごむことができないのを、とりわけさびしく感じる、この二年半ほどでした。

八戸ブックセンターを訪ねたのは、2019年の10月のことです。里中満智子先生による、『かたづの!』のコミック版が発売された年でもあり、八戸ブックセンターでは、その原画展も企画していただいたことがありました。

街の中心部にあるブックセンターは、木の香りのする、なんとも素敵で、ビールも飲めるのに感激した覚えがあります。八戸にしばらく逗留して、ブックセンターの執筆スペースに「出勤」して小説を書くのもいいなあと、ちょっと夢想しました。ただ、わたしは下戸なので、ビールとイカチーズの「なかよし」を手にカンヅメブースに籠ったら、すぐに寝てしまいそうですが。

八戸ブックセンターの取り組みで注目していたのは、ライター・イン・レジデンス、あるいはライターズ・ワークショップのような試みです。米国のアイオワ大学にインターナショナル・ライティング・プログラム(IWP)という、歴史ある講座があつて、世界中から作家や詩人、映画作家などを招聘し、滞在させるのですが、こうした催しを、八戸ブックセンター中心に行おうとしているというような記事が、2020年の2月に新聞に載りました。柴崎友香さんと滝口悠生さんが招かれてイベントを行ったというものでした。それこそほんとうに、コロナ禍による緊急事態宣言が出る前、ギリギリのタイミングのイベントだったのでしょう。

わたし自身も、アイオワ大学のIWPに参加したことがあります。そこで世界各国の作家の友人と過ごした体験はとても大きな、得難いものだったので、日本にもそんなプログラムがあるといいのになあと、長いこと思っていました。だから、八戸ブックセンターの取り組みには注目していたのですが、企画されていたイベントなども、中止を余儀なくされたり、ペンディングになってしまったりしているのかもしれないと思うと、とても残念です。

世界の国々が少しずつ、また、お互いに扉を開いていく中、しかし、疫病とは別の理由で、国境

は常に暴力に晒される危険を持っているという事実を連日見せられているいま、「本」を通じてつながる世界の回復とその深まりを願わずにはいられません。

5周年を迎える八戸ブックセンターが、今後も、平和と文化の息づくハブとして、より一層、発展していくことを、心よりお祈り申し上げます。

中島京子 kyoko nakajima

小説家

市制施行90周年記念事業「中島京子×梯久美子
トークイベント 八戸人の必読書『かたづの!』と
根城の女大名清心尼」(2019)

1964年東京都出身。2003年『FUTON』(講談社)で小説家デビュー。2010年『小さい
おうち』(文藝春秋)で直木賞受賞。2015年
『かたづの!』(集英社)で河合隼雄物語賞、
歴史時代作家クラブ作品賞。『オリーブの
実るころ』(講談社)など著書多数。

